

# フェルディナント・フォン・ザール『医者トロヤン』論

## — 近代化する村の暮らし —

小 谷 一 夫

Ferdinand von Saars Novelle „Doktor Trojan“

— Das dörfliche Leben im Prozess der Modernisierung —

Kazuo KOTANI

### Zusammenfassung

Ferdinand von Saar hielt sich oft bei seiner Mäzenin, Fürstin Elisabeth von Salm, in Mähren auf und schrieb dort mehrere Novellen. Eine dieser Novellen ist „Doktor Trojan“ (1896), die „unter seinen späteren Geschichten am rundesten ist“ (Bettelheim). Sie wurde nicht bloß im fürstlichen Schloss von Raitz geschrieben, sondern spielt sich auch inhaltlich in Raitz ab. Die Novelle erzählt vom Schicksal eines Mannes, der lange Zeit als Arzt ohne Doktordiplom im Dorf tätig gewesen ist. Die persönliche Tragik der Hauptperson wird aber im engen Zusammenhang mit der Modernisierung des dörflichen Lebens geschildert. Als realistischer Schriftsteller stellt Saar hier ein wirklichkeitsnahes Bild des Dorfes im Mähren der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts dar, das sich gerade im Übergang von der „Gemeinschaft“ zur „Gesellschaft“ im Sinne des Soziologen Ferdinand Tönnies befand. Zugleich übt der Autor scharfe Kritik an der Medizin bzw. an den Ärzten der damaligen Zeit, nämlich an ihrer wirtschaftlichen Orientierung sowie an ihrer Überbewertung des chirurgischen Eingriffs. Außerdem kann man in der Gestaltung der Hauptfigur, die Saar als einen „selbstlosen, aufopfernden“ Arzt beschreibt, große Sympathie des Dichters für jene Menschen herauslesen, die „der Geist der Zeit“ zugrunde richtet.

Schlüsselwörter : Ferdinand von Saar, „Doktor Trojan“, Mähren, Modernisierung

### I.

フェルディナント・フォン・ザールは「パトロンに養われた最後の作家」<sup>1)</sup>とも言われる。彼の後ろ盾となり、さまざまな援助を惜しなかったパトロンの一人にエリーザベト・フォン・ザルム侯爵夫人 (Fürstin Elisabeth von Salm 1832–1894) がいた。芸術に深い関心を寄せていた夫人は、ウィーンで芸術サロンを主催していただけではなく、モラヴィア地方 (現チェコ領) のブランスコとライツ (Raitz) に所有していた館にも芸術家たちを招待することが多かった。モラヴィアのザルム侯爵夫人の館にザールが初めて招かれたのは1872年の夏のことであった。そのときウィーンのヴェルトハイムシュタイン夫人に宛てて彼が書き送った手紙には、次のように記されている。

館は素晴らしい所にあります。いちめん花と緑に囲まれています。おそらくご存知とは思いますが、この辺り一帯は、炭鉱や製鉄所があって、たいそう活気があります。狩猟に出かけたり、徒歩や馬で遠出をしたりするのは、座ってばかりで軟弱になった私の身体のためにもなるでしょう。<sup>2)</sup>

こののち、ザールはしばしばザルム侯爵夫人の館を訪れるようになり、ときには一年の大半をモラヴィア地方で過ごすこともあった。したがって、彼の作品にはモラヴィアで書かれたものも多く、なかにはモラヴィア地方を舞台とした小説も少なくない。そのひとつに『医者トロヤン』 („Doktor Trojan“) がある。『医者トロヤン』は、1896年9月に「新自由新聞」 („Neue Freie Presse“) に掲載されたのち、彼の作品集『余韻』 („Nachklänge“) (1899) に収められた短編小説である

が、ザールはこの小説を1896年の夏にザルム侯爵夫人のライツの館で執筆したのであった。<sup>3)</sup>

『医者トローヤン』は、「ザール後期の物語の中では最も完成度が高い」<sup>4)</sup>とも評される小説であり、モラヴィアを舞台とするザールの小説群を代表する作品である。本稿の目的は、「リアリズム作家」と言われるザールが、この小説をとおして19世紀後半のモラヴィア社会とそこに生きる人間たちをどのように描き出しているのかを明らかにすることである。

## II.

物語は概略、以下のような内容である。

語り手の「私」は、ある伯爵家の客人として、初めてR村<sup>5)</sup>を訪れる。その日のうちに、彼は村の雑貨店で医者トローヤンから話しかけられる。およそ医者らしからぬ風貌のトローヤンについて、店主のネズバダは「私」に、彼は並の医者が敵わないほど優秀ではあるが、正規の医者ではないと教えてくれる。ある日、近郊の丘陵地を訪れた「私」は、そこで偶然トローヤンと再会し、二人の間に会話が交わされることになる。そして、「私」は、なぜ彼が医師免許もなく医療に従事しているのか、その訳を聞くことになる。トローヤンは、村医者をしていた父親に命じられるまま、いったんはウィーンで医学の勉強を始めたが、解剖への生理的嫌悪感からけっきょく学業を中断したのだった。その後R村に戻り、父親の助手を務めるかたわら、独学で医学を学び、父の死後は一人でその仕事を継いでいたのである。物語の中で、「私」とトローヤンが直接言葉を交わすのは、この2回だけである。その後、予定を早めてR村を後にせざるをえなくなった「私」が、再び同村を訪問したのは約8年後のことである。そして、伯爵家所有の工場専属医であるフーレッシュ医師から、「私」はトローヤンがすでに不帰の客となったことを知らされる。フーレッシュ医師が「私」に語ってくれたところによると、その後トローヤンを取り巻く状況は大きく変化し、彼は次第に追い詰められていったのだった。すなわち、R村に正規の医院と薬局ができて、彼のところにやって来る患者が減っていたのにくわえて、トローヤンの診療活動が違法行為として繰り返し告発され、彼は罰金刑、さらには、禁錮刑まで受けるに至ったのである。父親と親しかったヴェンカ医師が勤め先を世話してくれたが、長続きせず、トローヤンはついに彼らの前から姿を消してしまう。彼がある子持ち女と同棲生活を送りながら、なおも診療行為を行っている、という噂をフーレッシュが耳にしたのは、その後しばらくしてからのことであった。そして、3ヶ月ほ

ど経ったある夜のこと。突然トローヤンがフーレッシュ医師のもとを訪れ、往診を要請する。しかし、駆けつけたフーレッシュの目の前に横たわっていたのは、炭疽のため死期も間近の女であった。すでに手の施しようもなく、そのまま女は息を引き取る。翌朝、地区医のスルプ医師と一緒に、再びトローヤンの家を訪れたフーレッシュ医師は、そこでじつにおぞましい光景を目の当たりにする。いちめん血の海ようになった床の上で、トローヤンが鎌で首を掻ききって死んでいたのである。

## III - I.

語り手の「私」がトローヤンと初めて出会うのは、筆記具を買いに「私」がR村の食料・雑貨店に出かける小説冒頭の場面においてである。店主に「いつまで滞在の予定か」と問われた「私」が「夏の間中、滞在することになるだろう」と答えたとき、横で二人のやりとりを聞いていたトローヤンが突然話しかけてきたのである。

「そこのお方、まず後悔はなさらないと思いますよ！なぜなら、この辺りは他にはまずないような特徴をもった土地だからです。好もしさや野趣に富んだロマンティックな雰囲気がひとつになっていて、そのうえ、スイスのように、気分を爽快にしてくれたり、神経を強固なものにしてくれる空気にも恵まれているんです！」(S.170f.)

その後自らR村一帯を見て回った「私」は、トローヤンの言葉が本当であることを実感する。

「医者トローヤン」がこの地方をほめたたえて言ったことは、みな嘘ではなかった。ときには馬車で、ときには一人徒歩で、それから程無くあちこち見て回った私は、変化に富んだその美しさを目の当たりにしたのである。(S.175)

それからまもなく、ヨイショとばかりに最後の一步を上りきった私は、台地の上に立っていた。心地よい風が身体を包んだ。目の前には、一面、麦の穂がすでに刈り入れを待つばかりに実り、そよ風に揺れていた。麦畑は遠くの方まで広がっていた。(S.176)

こうして、R村の周辺には、心身をリフレッシュしてくれる豊かな自然とのどかな田園風景とがまず広がっているのである。

### Ⅲ - Ⅱ.

周囲の美しい自然とはまさに対照的な印象を「私」に与えたのがR村の中心部の様子である。

あばら家のような建物に周囲を囲まれた、<sup>ひとけ</sup>人気のないマルクト広場、真ん中にはよく見かけのようなガチョウの棲む池が広がっている。そんな広場へとやって来た私の目に直ぐに飛び込んできたのは、一軒のうらぶれた商店だった。店には商業神メルクリウスのシンボルが掲げられ、また、入り口のドアに上には、雨風にさらされ年季の入った看板が下がっていた。そこには「N. ネズバダ、食料・雑貨店」と書かれていた。(S.169f.)

「あばら家のような建物」、「<sup>ひとけ</sup>人気のないマルクト広場」、「うらぶれた商店」、「雨風にさらされ年季の入った看板」といった言葉から浮かび上がってくるのは、寂れた寒村の姿にほかならない。もちろん語り手が都会からやって来た人間である点は考慮に入れなければならないのだが、次に引用するように、フーレッシュ医師によれば、村民も「この地に根づいていた荒廃状態に気づき」始めていたのであって、「私」が受けた印象はけっして間違っただけではなかったのである。

「私」がR村を再訪したのは約8年後のことであるが、この間村は大きな変化の波に洗われていた。8年の間に何が起きたのか、フーレッシュ医師が「私」に語っている。

あなたが初めてここを訪れたとき、まだほとんどの人が気づかない程度ではありましたが、すでにこの地でも、時代精神は活動し始めていたのです。人々は、この地に根づいていた荒廃状態に気づき、然るべき変革を成し遂げようと力を注いだのです。人々が目指したのは村を大きくすることでした。新しい建物が建ち始め、村は徐々にきれいになっていきました。加えて、村が地理的に恵まれた場所にあったことから、州都を出て川沿いに拠点を移した二つの企業の工場が当地に建設されることになったのです。こうして、企業の幹部たちが、何人かの職員、職工長とともにやって来ました。あちこちから労働者たちが押し寄せ、なかにはここに住み着くことになった者も出てきたことは言うまでもありません。そして、彼らに続いて、進取の気性に富んださまざまな実業家や職人たちも、この地へと引き寄せられたのです。すなわち、昔は顧みられることもまづなかった静かな我がR村は — おそらくもうご覧になられたと思いますが — 発展を遂げ、そ

れなりに結構名前も知られるようになり、無視できない存在にまでなったのです。想像に難くないことと思いますが、こうした状況のなかで、まもなく医者と薬剤師もやって来たのです。(S.189)

「時代精神」がR村の暮らしに劇的な変化をもたらしたのは、こうしてごく近年になってからのことであるが、それ以前からすでにモラヴィア地方は新時代を迎えつつあったことを小説は示している。

私が — あれはまだ今の伯爵の御祖父様の頃ですが — この工場専属医として雇われたとき (S.173)

私の父親はここに僅かですが土地と建物を所有していました。晩年ある人に口説かれて、父親は、炭鉱の開発を目指して設立されたある企業に投資したのです。事業は完全な失敗に終わり、私の父親も全財産が競売にかけられたのでした。(S.185)

一つ目はヴァンカ医師が、二つ目はトロヤンが「私」を相手に語る話の中に出てくる言葉である。ヴァンカ医師を工場専属医として雇ったのは、語り手の「私」が食客となっていた伯爵家の先々代であった。貴族階級による領地経営といえ、もともと農業が主体であったわけだが、企業家として工場の経営に乗り出す貴族がすでにこの地にも出現していたのである。他方、ヴァンカ医師も一目置くほどの村医者であったトロヤンの父親は、炭鉱の開発計画に首を突っ込んだばかりに、けっきょくは全財産を失うことになった。ここには、産業革命の進展にともなって、石炭の需要が増大していたという時代背景が映し出されていると同時に、近代化の流れの中で新しい会社が次々と設立され、それまで投資などとは無縁であったトロヤンの父親のような「一般人」までも巻き込むほど、社会の資本主義化が進行しつつあったことが示されている。

19世紀後半、ハプスブルク帝国では、帝国内を結ぶ鉄道路線の敷設に力が注がれる一方、各地に機械制大工場が建設されるなど、急速に産業の近代化が進んだ。豊かな資本力を有し、自由主義経済の推進を唱える新興ブルジョアジーたちが台頭するなかで、歴史上「グリュンダーツァイトGründerzeit」（会社設立ブームの時代）と呼ばれる、じつに活況に満ちた時代が到来したのであった。オーストリアの工業が当時いかに飛躍的な発展を遂げたのか、ロビン・オーキー『東欧近代史』（越村勲ほか編訳）の中に、次のような具体的な記述がある。

近代工業の基礎は1850年代に築かれた。その直接の刺激となったのは、農奴解放、オーストリア＝ハンガリーの関税障壁やギルド制限の撤廃、フランスのクレディ・モビリエのように工業投資を準備する銀行の設立などであった。1867年に立憲政府がつくられたことも刺激になって、1873年まであのめざましい会社群生時代（グリュンダーツァイト）が続いた。その間に138の新しい銀行が出現し、株式資本が工業資本に占める割合は8倍にはねあがり、鉄道網は4000キロメートルから1万キロメートルに伸びた。重工業が最も恩恵に浴したが、綿織業の機械化もまた大きな進歩を遂げた。ボヘミアの甜菜生産は、地主が農奴を解放して得た補償金の多くを投資して成長した。[...] 経済の発展は、1873年の金融恐慌によって突然停止したが、1880年代初頭からふたたび始まった。この時から、外国技術の迅速な採用と国家の援助政策によって、あらゆる方面での着実な進歩が可能になった。鉄道は1860年代と1870年代にその距離を2倍に伸ばし、1880年から1913年のあいだに国有化されてその距離をさらに倍にした。オーストリアは1879年に保護関税に戻り、1892年には金本位制を採用して通貨の安定を図った。電化や鉋坑、より優れたボーリング技術によって、1872年に6万2000人の鉋夫が掘り出していたものに比べて、1913年には12万6000人の鉋夫が5倍以上の石炭を掘り出すようになった。ボヘミアの鉄鉋石の精錬にはトーマス法が採用されて成功した。織物業では、綿織物が毛織物、麻織物、絹織物を凌駕した。化学製品、電気、石油化学もまた、新しく技術的に進んだ分野であった。全体として、石炭の産出高は1851年の100万トンから1872年には900万トン、1913年には4400万トンに増加しており、同じ時期に銑鉄は16万トンから37万トンそして175万トンへ、綿紡錘の数は137万個から150万個そして470万個へと増加した。こうしたことは、かなりの進歩があったことを十分に示すものである。<sup>9)</sup>

このように総体的に言えば、稀にみる高度な経済成長を謳歌した時代ではあったが、いっぽう小説に描かれているように、個別の企業についてみれば、浮き沈みもまた激しい時代であったことは想像に難くない。事実、1873年には — 短期間ではあったが — 株価が暴落し、少なからぬ数の会社が倒産の憂き目にあい、また、「投機ブーム」に沸いていた投資家たちの中には破産する者が多く出たのであった。

上述の引用中にも、ボヘミアの産業について触れている箇所があるが、ボヘミア、モラヴィア、シュレージェンから成るチェコ地方には、もともと繊維、ガラス、ビー

ル醸造、製糖といった諸産業が根づいていた。19世紀の後半になると、これら伝統的産業のほか、オストラヴァやクラドノの石炭産業・鉄鋼業、プラハやブルノ（ブリュン）の機械工業、プルゼン（ピルゼン）の兵器産業など、各地で重工業が発展した。小説において具体名が挙げられている工業部門は、製糖業（S.178）、石炭産業（S.185）、製鉄業（S.194）の三つである。いずれも当時のチェコ地方を代表する産業であったわけだが、最初の2部門について、エーリヒ・ツェルナーの『オーストリア史』（リンツビヒラ裕美訳）に比較的詳しい記述があるので、ここでそれを引用しておこう。

製糖業は大変好況であった。国内産甜菜砂糖は植民地からの蔗糖を完全に駆逐し、帝政〔筆者註：皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の時代〕後期にはオーストリアの砂糖は、国内消費が過増したとはいえ、重要な輸出品目の一つとなった。甜菜栽培も製糖業もその中心地はズデーテン地方にあり、218工場の内、今日のオーストリアには6工場しかなかった。[...] 1848年の全オーストリアの出炭量は87万トンで、1904年には3386万トンとなった。特に、相応の資本市場を後楯とする、ロートシルト家やグートマン家のような資本力の大きい企業家が牛耳っていたモラヴィア・シュレージェンの豊かな炭坑地帯で、採掘が促進されていた。[...] アルプス地方の石炭の産出は質量共にズデーテン地方には太刀打ち出来なかった。それでも中央シュタイアーマルクの炭田には良質の輝炭層がかなり豊富に存在し、石炭では小量を出炭するグリーンバッハのみが、膨大なシュレージェンの炭田（オストラヴァ＝カルヴィナ）に対抗した。<sup>7)</sup>

急速な工業化と連動する形で進行していたのが、農村部における社会、産業構造上の変化であった。ハプスブルク帝国においては、1848年の三月革命を契機に、それまで存続していた農奴制が廃止され、領主による封建的な農村支配は終わりを告げた。しかし、それは必ずしも農村全体における生活条件の改善を意味していたわけではない。

封建的諸負担の廃棄とともに、領主の隷農〔＝農奴〕への保護義務（貧民救済、寡婦・孤児の保護など）や、農村住民の領主地での放牧権、領主森林での薪木採取権も廃止されたために、それに依存していた農村の貧民層の生活条件は悪化することになった。<sup>8)</sup>

こうして、19世紀後半の農村社会においては、住民間

の貧富の差はむしろ拡大し、社会構造の二極化が進む結果となったのである。

旧領主だけでなく、比較的富裕な農民たちの協同組合もこれらの農業関連産業の経営にたずさわった。1850年代から60年代にかけて、ボヘミア、モラヴィアでは、前貸し金庫や農法改善のための協会（愛国農業協会その他）など、農民の経済的な結社が濃いネットワークを形成しつつあり、そのための啓蒙雑誌も数多く発行された。その一方で、農村住民の階層分化も進行した。土地の再配分はおこなわれなかったため、農村の貧民問題は解決されなかったのである。農業労働、下僕、地域によっては工場労働などの雇用口があったが、貧民を吸収するにはいたらなかった。<sup>9)</sup>

小説『医者トロヤン』には、農村社会の変化にともなって工場労働者となってゆく農民の姿を示唆している人物が登場する。トロヤンの患者の一人で、やがて彼が虜になってしまう子持ちの女がそれである。<sup>10)</sup> 女は日雇い労働で家族を支えていたが、ごくつぶしの亭主は「彼女の乏しい日給の半分を、火酒を飲むのに使っていた」(S.178) あげく、出奔して行方知れずとなってしまう。ろくでもない亭主と別れることができ、彼女にとってはむしろよかったのだ、と話すトロヤンは、同時に、彼女たち、日雇い労働者が強いられている過酷な暮らしを「私」に語ってくれるのである。

しかし、苦勞の種も心配の種も尽きることはありません！ 畑仕事のことを言っているわけではありません。というのも、農作業は自然の中で行うので、たとえ汗をかいても、私たちにとっては健康にいいんです。しかし、秋になり、そして、冬が到来すると、北風がこの台地を吹き抜け、さらには雪がこの地を覆います！ そうなると来る日も来る日も、夜明けには麓の製糖工場か、あるいは、その他ちょうど求人のある働き口へ出かけなくてはなりません！ ここに戻ってくるのは夜も遅くなってからで、その間に食べたものといえば、パンと傷んだジャガイモだけ。これでは、腸チフスになっても何ら不思議はありません。(S.178)

こうして小説は、モラヴィアの農村地帯においても社会構造が漸次変化を遂げ、農民が安価な労働者として搾取され、窮迫した生活を余儀なくされるまでになっていた様子を描写しているのである。

### III - III.

それでは、ほぼ8年後に再び伯爵の館を訪れた「私」は、はたしてどれほど変貌したR村の姿を目の当たりにすることになったのであろうか。

さて駅を出て、中心部へと向かった私は呆気にとられてしまった。昔の面影はほとんどもうないと言ってよかった。それほど、この8年の間に、村は大きくなり、きれいになっていた。中心部に足を踏み入れるとすぐに公園が見えた。そこにはアカシアが植えられ、木陰には白く塗られたベンチがいくつか置かれていた。そして、かつてはぬかるみに足を取られることもしばしばだった目抜き通りには、きれいに舗装された歩道が作られ、また、通り沿いの家々はほとんどすべてが新築されたものだった。概ね平屋ではあったが、造りがしっかりしていて、外観も今風だった。新しい商店も私の目を引いた。そのなかに、大きな金文字の看板を掲げたいそう立派な店があった。そこには、「レカルナーアポテーク」[筆者註：前者はチェコ語、後者はドイツ語。意味はともに「薬局」と書かれていた。そして、通りを挟んで反対側、薬局から程遠からぬところに、綺麗な一軒の家が建っていた。門には、同じくチェコ語とドイツ語で書かれた表札が下がっていた。「総合医・医学博士 W. スルプ。診療時間：午後2時—4時」。そして、例の広場も今はすっかり様子が変わっていた！ 広場の形がきれいな四辺形に整備され、周りをじつに瀟洒な建物が取り囲んでいた。ガチョウの棲む池はまだあったが、しゃれた鋳鉄製の柵が周囲を囲み、さらに、池の中に設置された噴水から空に向かって勢いよく水がほとぼしり出ていた。ちょうどその向かい側に、りっぱな出窓の付いた2階建てのたいへん重厚な建物がそびえていた。出入り口の上には、遠くからでも読める大きさで、「ラドニツェーラートハウス」[筆者註：前者はチェコ語、後者はドイツ語。意味はともに「市役所、役場」と書かれていた。しかし、1階部分の半分は大きな商店が占めていた。店舗の上方には、A. ブラズダという社名が人目を引くように掲げられているだけで、ほかに何も書かれていなかった。二つの明るく照らされたショーウィンドーの中を覗くと、そこには輸入食料品、南方の果物、高級食料品、さらには、紳士用ならびに婦人用の既製服がいかにも客の購買意欲をそそるよう並べられていた。要するに、大都会風の大型商店であった。ネズバダ氏のあの見栄えのしない雑貨店は、店が入っていた建物もろとも、跡形もなく姿を消していた。進歩！ どこ

へ行っても、進歩、というわけか！ こうして、館までやって来た私は、そんなことを考えていた。館のなかは、もちろん何も変わってはいなかった。(S.186f.)

フーレッシュ医師の言葉どおり、「私」がまず懐いた感想も、「村は大きくなり、きれいになっていた」というものであった。村の規模が拡大したとの印象を得たのは、通り沿いに「造りがしっかりしていて、外観も今風」の新築住宅が建ち並び、加えて、「りっぱな出窓の付いた2階建てのたいへん重厚な」村役場がそびえているのを見たからである。また、今やモダンで美しい姿をみせているR村に、「私」はかつての面影をほとんど見出すことができない。というのも、以前は歩くにも骨が折れるほどぬかるんでいた村の通りには、「きれいに舗装された歩道が作られ」、マルクト広場を取り巻いていた「あばら家のような建物」は「じつに瀟洒な建物」に取って代われ、さらに、広場そのものも「きれいな四辺形に整備され」て、中央の池には「しゃれた鑄鉄製の柵」と噴水が設置されていたからである。そして、R村の近代化、ないしは、「都市化」をもっとも象徴的に表しているのが、「中心部に足を踏み入れるとすぐに」見えてきた公園である。「そこにはアカシアが植えられ、木陰には白く塗られたベンチがいくつか置かれていた。」ここに登場するアカシアは正確にはニセアカシアと呼ばれる北アメリカ原産の落葉高木で、優美な白い花を咲かせる。ヨーロッパには17世紀に持ち込まれ、以後街路樹や公園樹として広く植えられるようになった。ニセアカシアが満開の白い花びらに包まれるとき、下に置かれた白いベンチと一体となって、公園一帯には洗練された都会的雰囲気漂ったであろうことが想像される。そもそも公園とは、都市生活者が日々の疲れを癒し、くつろぎを得る場として作られる擬似的自然空間であることを考えれば、公園ができたということ自体、R村に都市的要素が入り込んだことを意味しているのである。

マルクト広場に生じていた大きな変化の一つが、「ネズバダ氏のあの見栄えのしない雑貨店」が「跡形もなく姿を消し」、代わって、村役場の中にブラズダという名前の商店ができていたことである。前述のとおり、8年前「私」が見たネズバダの店は、商業神メルクリウスのシンボルが掲げられているような昔ながらの商店で、建物もじつに貧相であった。商品の陳列棚には埃が被り、カウンターのすぐ近くにえんどう豆の入った大きな袋が転がっている (S.170)、そんな店だった。それにひきかえ、ブラズダの店は、村役場1階部分の半分を占める「大都会風的大型商店」である。明るく照らされたショーウィンドー、そこに並べられた舶来品や工業製品など、

それまで見たこともなかった目新しい商品の数々に、村人は洗練された都会の息吹を感じたのであった。零細なネズバダの店が、品揃えの豊富な新しい大型商店との競争に敗れ、倒産した様子を、フーレッシュ医師はこう伝えている。

以前貿易会社に勤めていた市長の息子が広場で開業した大型店が、ネズバダの店に大きな損失を与えたのでした。彼が考えた思い切った対抗手段は、逆に裏目に出て、ネズバダは破産を申し立てざるをえなくなり、生計を立てる新たな道を求め、手元に残った財産を持って国外へと移住していきました。(S.193)

1859年、経済を活性化させる目的で、それまで行われていた営業規制、同業者組合規制が撤廃され、ごく一部の職種を除いて、営業の自由を認める新たな「営業法」が制定された。こうして経済の自由化が推し進められるなかで、当然の結果として、業者間の生き残り競争は激しさを増すことになったのである。

手工業者の状況よりもっと厳しかったのは、小売商人であったかも知れない。ウィーンや地方都市の「零細個人商店」の多くは、もはや新時代に対応出来ない状況にあった。<sup>11)</sup>

自由主義的経済の拡大という時代の波をもろに被ったひとりが、ほかならぬネズバダだったのである。

さらにもうひとつ、見逃すことができない変化が小説には描かれている。それは、R村に新しく建てられた薬局、医院、村役場のすべてに見られる特徴として指摘できる点であるが、これらの建物では、その名前を記したプレートや表札がいずれもチェコ語とドイツ語の両言語で書かれ、さらに、チェコ語の方がドイツ語よりも先に表示されているということである。また、トローヤンとスルプの確執を語るフーレッシュ医師の話の中には、次のような箇所が出てくる。

そして、結局、何と言っても本物の医師であって、そのうえ急進派のチェコ人政党の側に立っていたスルプを支持する声が優勢になりました。このチェコ人政党は、地域社会では徐々に支配的な勢力となっていました。新しい村長も今ではこの党の出身でした。彼はたいへんな金満家で、また、もぐりの医者の肩をもつなど沽券にかかわると思っていました。昔からまったく中立の立場を取ってきたにもかかわらず、トローヤンが民族的にはドイツ系であったため、なおさらでした。

(S.192)

小説には、もう一人、トローヤンに対して厳しい姿勢で臨む郡長が登場する。

ちょうどその頃新しい郡長が行政のトップに迎えられたのでした。彼はなにごとにも急進的な立場から事に当たることを自分の義務と考えていました。トローヤンの件で報告を受けた彼は激怒し、書類をすぐさま裁判所の方へ回したのです。(S.191)

郡長がいかなる政治的党派に属する人物であったのか、小説は具体的には語っていないが、ドイツ系のトローヤンに対する冷然たる態度のほか、R村の村長同様、当時新たにこの地方の行政区の長となった点、そして、「急進的な立場から事に当たる」人物である点などから、村長と同じく「急進派のチェコ人政党」の一員と考えるのがもっとも自然であろう。

1867年に成立した「アウスグライヒ」(和協)によって、ハプスブルク帝国はオーストリア＝ハンガリー二重君主国へと衣替えした。多民族国家であったハプスブルク帝国の中でも、とりわけ独立心が旺盛で、長年にわたって民族運動を展開してきたマジャール民族は、これによってついにオーストリアからの政治的独立を手にしたのであった。しかしながら、それはオーストリアのドイツ民族とハンガリーのマジャール民族が新たに帝国の西半分と東半分を統治し、それぞれ他の諸民族を支配する体制が出来上がったことを意味するものであったので、帝国を構成するスラヴ系など他の民族の間には大いに不満が募ることになった。アウスグライヒに対してもっとも強い反発を示したのがチェコ民族であった。前述のとおり、当時チェコ地方はめざましい経済発展を遂げつつあり、そんな中でチェコ人の民族感情も昂まりをみせ、民族的要求を掲げて、中央政府と激しく対立するようになった。そして、チェコの民族運動は、1880年に最初の成果を挙げることになる。そのひとつが言語にかかわる権利の拡大であった。矢田俊隆編『東欧史(新版)』には次のように記されている。

1867年のアウスグライヒののち、チェコ人はドイツ人自由派の中央集権的支配に憤激して、帝国議会をボイコットし、民族の平等な権利を求め、ボヘミア、モラヴィア、シュレージエンをあわせた独立王国の再建を主張した。[...] 1879年にドイツ人自由派が勢力を失ったあと、首相になったボヘミア貴族出身のターフェは、スラヴ民族に好意を示し、1880年チェコ人の要求をい

れてボヘミア・モラヴィア両州に言語令を発布し、教育のうえで、また政府と市民の行政的接触のうえで、ドイツ語とチェコ語に同じ権利を認め、チェコ人は帝国議会に復帰した。<sup>12)</sup>

この言語令をうけて、1882年にはプラハ大学がドイツ部とチェコ部に二分されるなど、チェコ語の地位はしだいに向上していったのである。

いっぽう、チェコ人の民族運動は、支持層や政治路線の違いから、穏健派の老年チェコ党と急進派の青年チェコ党とに分裂する。ターフェ内閣とも連携した老年チェコ党がしだいに力を失っていったのに対して、より民族色の強い青年チェコ党は — ボヘミア(ズデーテン地方)で先鋭化していたドイツ民族主義にも触発される形で — その勢力を拡大していった。

一方チェコ人の進出におびやかされたドイツ人のあいだには、オーストリア国家を措いてドイツ人の利益を先にしようとするドイツ民族至上主義が発展しはじめ、ビスマルクの新ドイツ帝国に魅力を感じて、これとの合体を望むものもあらわれた。[...] その反動として、チェコ人の側にも急進主義が発達し、ボヘミアでは、1848年の革命以後民族運動を指導してきた、貴族中心の老年チェコ党が、知識階級とミドルクラスを基礎とした、急進的な青年チェコ党のために背後に押しやられ、後者はチェコ社会の民主化を主張するとともにチェコ地方にハンガリーと同じ独自の政権を立て、ハプスブルク帝国を民主的な諸民族の連邦に改造しようとした。<sup>13)</sup>

こうして、チェコ語とドイツ語の2ヶ国語表記、「急進派のチェコ人政党」といった小説中の叙述は、いずれも客観的事実を踏まえたうえで、19世紀後半のチェコ地方におけるナショナリズムの昂まりをいきいきと私たちに伝えてくれているのである。

『医者トローヤン』において一見なにげなく描かれている村のたたずまいや人々の暮らしぶりであるが、あらためてフランツ・ヨーゼフ時代のハプスブルク帝国の歴史をひもといてみると、小説は細部に至るまで当時のオーストリア、なかでもチェコ地方の政治、経済、そして、社会情勢をじつにリアルに描き出していることが分かる。

#### IV - I.

前章では小説『医者トローヤン』が描いているR村の近代化について考察したが、それは小説のプロットその

ものとも少なからぬかわりを有しているのである。主人公のトローヤンが悲劇的最期を迎えることになるのは、それまで村でただ一人の「医者」として村人の信頼も厚かった彼が「にせ医者」の烙印を押されたことが間接的な原因となっている。そして、トローヤンの診療行為が違法なものであるとして裁判にまでかけられるに至った、その背景にあったのが、R村の近代化という時代の流れにほかならない。『医者トローヤン』は、19世紀後半の「時代精神」の動き、ならびに、モラヴィア地方の近代化を活写した作品であるが、とくに医者と医療が当時どのような変化を遂げつつあったのかということが、主人公を通して克明に描かれているところにその特徴がある。本章ではその点を見ることにしよう。

父親の後を継いで長年R村の医療に携わってきたトローヤンが語り手の「私」を相手に、地方と都会とでは医療のあり方や医者の役割がいかに異なっているかをとうとうと述べるくだりがある。

「おお、私は自分の職分に心底満足しております。たぶんあなたがお考えになっていらっしゃるほど、それは取るに足らない仕事ではけっしてありません。地方の医者というのは、その責任と義務を十分果たそうと思えば、都会の医者が必ずしも持ち合わせてはいない資質が要求されるのです。第一に、自分のことも忘れて職務に専心すること。それから、確かな洞察力 — ある意味では予見の才能。症状がそうはっきりとは表に出ていない場合、たとえわれわれの患者に問診しても、なにも聞き出すことはできません。彼らは、そもそもどこが痛むのかさえ、伝えられないことがしばしばなのです。ほとんどの人が自分の身体の状態を的確な言葉で説明することができる都会の患者とはまったく違うんです。都会ならば聞く耳さえ持っていればいいわけです。それから、治療ですよ！ 都会では患者に対して指示するのも簡単です。冷えないようにしてください！ 外出は控えてください！ これこれのものを摂ってください！ カールスバート [筆者註：有名な温泉地] へ行く必要がありますね！ といった具合です。労苦と貧困にあふれたこの地では、そんなふうにはいきません。財産を持っている人も少しはいますが、彼らでさえもまったく金に不自由していないというわけではありません。そういうわけで、一人一人、その暮らし向きを十分把握したうえで、それに応じた治療法を考えなくてはならないのです。患者に指示を与えるだけではだめ、さらに世話してあげなくてはいいんです。そして、多くの場合、患者が飢え死になどしないように、彼らを養ってやることも求められ

るのです。どうです、お分かりになりましたか、田舎では単なる医者ではなくて、サマリア人 [筆者註：苦境にある人にすすんで手をさしのべる者の意] でなくてはいけないのです！」 (S.183)

田舎と都会とでは、患者たち自身も、また、彼らを取り巻く環境もまったく違う。田舎の医者には都会の医者より多くのことが求められている。仕事に対する情熱、ある意味でより高度な診断能力<sup>14)</sup>、そして、患者のおかれている境遇に対する配慮である。全身全霊を傾けて献身的治療にあたること、すなわち、単なる医者を超えて、「サマリア人」となることが要請されている、とトローヤンは言うのである。実際トローヤンが、まさにR村の「サマリア人」として、地域の医療に挺身していたことは、フーレッシュ医師も認めている。「彼は、ほんとうに自分のことも忘れて、献身的に、最も貧しい患者さん、最も困っている患者さんの治療にあたっていました。そうやって地域社会に貢献していた彼のことを、私はむしろ、彼の父親と親しかったヴァンカ医師同様、心から尊敬していたのです。」 (S.189)

しかしながら、「都市化」にともなって新たに医師と薬剤師がR村にやって来たことで状況は一変する。それまでは村人から感謝こそされ、およそ問題視されたことなどなかったトローヤンの医療行為が、「違法行為」として非難されることになったのである。薬剤師は、「営業妨害を訴え、資格のない者の薬の販売を一切禁止する条例を村に制定させた。」 (S.190) しかし、それでも効果がないと分かると、今度は裁判所に訴えてやると脅すのだった (S.190)。また、医師スルプは表面的でお粗末な知識しか持ち合わせていない医者ではあったが (S.190)、「それでもカバンには博士の学位が入っている」 (S.190) 正規の医師であったので、機会を捉まえては、繰り返しトローヤンの違法診療を告発する。

社会の近代化とは、それまで社会的慣習や人々の暗黙の了解に基づいて行われていた事柄を制度化、ないしは、法令化すること、とも言える。医療について言えば、それは、公的な資格と免許をもった医師、看護師、薬剤師だけが医療行為に係わることができるということであって、同時に、それぞれが担う役割も明確に区別されたのである。したがって、正式の医師免許もないうえに、自ら薬を製造するトローヤンは、近代的医療制度下の資格化と分業化に真っ向から逆らう存在となっていたのである。



## IV - II.

前節で触れたトローヤンと「私」の対話場面の中に、トローヤンが自分の生活信条と医者としての姿勢を他の医者たちと比較しつつ述べている箇所がある。

「ほんとうに。すばらしい、そして、至福に満ちたお仕事ですね。」思いがけず感銘を覚えた私はこう言った。「ええ、まったくおっしゃるとおりです！ ですから、私はそれを誇りにしております。私の診療報酬では、食べていくのがやっと、と言うに近い生活ですが。まあ、それ以上なにも望みはありませんがね。診療をして、スープ代が稼げればいいんです。そう、スープ代が、ですよ！ 一杯のスープが飲めて、それにビールが少々」彼はコップを指さした。「そして、このパイプにつめる煙草があれば」彼は愛撫でもするように両手をパイプの方へ伸ばした。「ほかにもう何一つ、望むものはありません。そしてまた、これが私と他の医者たちの違うところなんです。彼らのほとんどは金を儲けたいだけ。もちろん、彼らにはお金も必要でしょう。誰もが私のように自由気儘な独身というわけではないですからね。しかし、いわゆる専門医、あいつらは金儲けしか頭にない連中です。一般の診察時間だけでひと財産築くんですから。そして、早く終われば終わるほど、それだけ結構、というわけです。診たと思ったら、もうおしまい。金が払えない者は、元気になるまでじっとしていなさい。金がなくてはスイス人も呼べない[筆者註：何事も金次第という意味]。その点、私はまったく別の考えを持った人間です。ほかならぬ最も貧しい人たちに治療を施してあげるのが私の最も望むところです。」(S.184)

医療行為を金儲けの手段としか考えない医者たちに対する痛烈な批判が展開されているが、その典型として、とくに「専門医」が槍玉に挙げられているということは、トローヤンの非難の矛先が主として近代的医療体制に向けられていることを意味している。そこには、医療もビジネスの一つと考える資本主義的風潮が今の医者を堕落させている、という彼の思いが感じられる。物語において、ビジネスとしての医療という時代の流れを象徴的に表現しているのが、その後スルプ医師が開業した医院に掲げられた表札であろう。「診療時間：午後2時－4時」と書かれたプレートは、医療行為が時間を区切って提供されるサービス業の一つとなったことを、なによりも雄弁に語っているのである。

いっぽう、「最も貧しい人たちに治療を施してあげる

のが私の最も望むところ」と語るトローヤンは、自身「食べていくのがやっと、と言うに近い」収入しかなく、身なりも粗末で（「くたびれた麦わら帽子とずいぶん擦り切れた夏服」(S.170)）、また、スルプ医師が「綺麗な」家に住んでいるのに対して、ちゃんとした住まいすら持っていないのである（S.185）。「私」との対話場面でトローヤンは、自分が今の暮らしに満足していること、そして、自分の職業に誇りを持っていることを繰り返し語っている（S.184, S.185）。私利を求めない彼のこのような活動を支えてきたのは、地域の医療を一人で担っているという矜持にほかならなかった。

トローヤンのまことに献身的な医療活動は、治療の現場においても、患者たちに対し限らない力を発揮していたことをフーレッシュ医師が証言している。「ただ彼がやって来たというだけで、患者たちは元気づけられ、症状も緩和し、さらには、治癒してしまうこともじつによくあった。」(S.189) ここには、「医は算術」という時代の流れの中で、トローヤンの診療行為がまさに「医は仁術」を地で行くものであったことが端的に示されている。しかし、自らの医療活動が「違法行為」として糾弾されるにいたり、トローヤンは「サマリア人」としての誇りを傷つけられ、地域医療を担っているという使命感も失せてしまう。加えて、彼の患者の一人であった美しい子持ち女への熱愛が彼の心を占めるようになる。

というのも、彼はある貧しい日雇い労働の女への激しい恋に身を焦がしていたのです。[...] 彼は女と深い間柄になりました。わずかですが、彼と親しい人もまだおりました。彼らにとっても、トローヤンの心を占めていた溢れんばかりの恋の情熱は、いくら驚いても驚き足りないほどでした。彼が自分の患者たちに対してもう以前のような丁寧な対応をみせなくなってしまったのも、原因はそんなところにあったようでした。彼は誰の目にもそれと分かるほど心ここにあらずといった様子で、まさに必要不可欠な指示を出し忘れることもしばしばでした。(S.192f.)

こうして、患者に全神経を集中して病状を把握し、全身全霊を傾けて治療に専心するというトローヤン本来の医療が、外的ならびに内的要因が絡み合う形で、彼自身もはや遂行しえなくなっていた点は、注意を払っておく必要があるだろう。なぜなら、そこにこの小説が悲劇に終わることになる遠因を見出すことができるからである。

小説の中でトローヤンは、手術万能主義の外科医療に対して激しい批判を加えている。

以前一度フーレッシュ医師と同じような議論をして、たいへんな言い争いになったことがあります。というのも、彼は「執刀すること」が人間に幸せをもたらすと考えているのです。彼はビルロートのまさに熱狂的な崇拜者、信奉者なんです。ビルロートが非凡な人間であること、また、彼が刮目に値する実績を上げてきたことは大いに認めます。しかしながら、彼は医学をもっぱらメスの支配下においてしまう危険を冒している、と言わざるをえません。もちろん、彼自身は、手術の必要性和その時期を正しく判断する能力を備えていることは疑いを入れませんし、また、彼が相談を受けるのは、もうほとんど二者択一を迫られているケースばかりなのです。しかし、彼の弟子たちにとっては、もはや他の治療法は存在しないのです。薬草を使って昔から作られてきた貴重な薬の数々を彼らは徹底的に馬鹿にします。性急な連中です。彼らは自然を出し抜いてやろうとして、自然を歪めているんです。しかし、「自然は飛躍せず」—そして、医者もまた飛躍してはいけない。たとえ、いくつかのケースにおいて、驚くほどの成果がさしあたり得られたとしても、後で重大な結果を招くこととなります。大抵の場合、それは、執行が1年先の、死刑判決が患者に下された、ということにはほかならないんです。(S.182)

トローヤンによるこのような外科批判は、物語の上では、メスに触ることすらできない「特異体質」(S.188)をもっているという主人公自身の性向に起因するものであることは言うを俟たないが、同時に、そこには19世紀後半におけるオーストリア医学界の状況が映し出されている。次節において、その点について少し触れておこう。

#### IV - III.

物語の中で、トローヤンは何人もの医学者ないし医者の名前を口にしているが、ヴァンカとフーレッシュを除けば、それらはいずれも実在の人物である。

それは、ヒルトルやロキタンスキのような本来の解剖学者、あるいは、ブリュッケのような生理学者の仕事です。オボルツァーやスコダはけっしてランセットに触りませんでした。シューやピタのところには外科医たちにそれを任せていたのです。なんと言っても、彼らは内科医だったのですから。(S.181)

彼はビルロートのまさに熱狂的な崇拜者、信奉者なんです。ビルロートが非凡な人間であること、また、彼

が刮目に値する実績を上げてきたことは大いに認めます。(S.182)

19世紀後半、オーストリアでは数多くの優れた医学者が活躍し、帝都ウィーンは当時「医学のメッカ」とまで言われた<sup>15)</sup>。ウィリアム・ジョンストンの『ウィーン精神。ハープスブルク帝国の思想と社会 1848-1938』(井上修一ほか訳)の中から、小説において言及されている医者、学者に関わる記述を引用しよう。

この新しい流れが頂点に達するのは、ケーニヒグレーツ生まれの解剖学者・外科医カール・フォン・ロキタンスキ(1804-1878)の時代である。1844年にウィーン大学医学部の教授に就任して以来、かれが手がけた死体解剖は、八万五千体を超えたといわれる。それまでヒポクラテスの遺した症候学に頼っていた診断が、ロキタンスキによる病理解剖の進歩のおかげで、正確なものになった。ロキタンスキの得たデータを整理して近代診断学を作りあげたのが、ヨーゼフ・スコダ(1805-1881)である。ピルゼンの出身で、有名なチェコの武器製造業者エーミール・フォン・スコダの伯父に当たる。かれが広く普及させたものに、今どこの診察室でも行われている打診法がある。[...]解剖の技法を完成させたヨーゼフ・ヒルトル(1810-1894)も有名であった。1845年からウィーン大学の教授を務めたかれの研究室でつくられる解剖標本は、世界中から求められた。[...]ウィーン学派の名声をになった学者がすべてロキタンスキ、スコダ、ヒルトルのように治療面を軽視していたわけではない。この学派で治療面で功績のあった名医も少なくない。ボヘミア生まれのヨーハン・フォン・オボルツァー(1808-1871)もその一人である。<sup>16)</sup>

なかでも、ビルロートは傑出した外科医として、その知名度は群を抜いていた。

しかし、名声なら、やはりドイツ出身だが、外科のテオドル・ビルロート(1829-1894)の方が上だった。かれは帝都一の名医といわれ、素人離れした音楽家でもあり、ブラームスやハンスリックと親交を結んでいた。かれは、エーテルとクロロホルムを使う麻酔法を開発し、胃の切除や咽喉の手術に優れたパイオニアの業績を残している。ビルロートは今述べたようにドイツ出身だが、この医学者には、内科的療法や薬物療法ではなく、とくに外科的療法を好んだ当時のウィーン医学界全体の傾向がよく現われている。患部はなまじ

治すより切り取ってしまう、というかれの考え方も、ウィーン医学界の病理解剖の偏重や薬物不信感と同じ根から出ている。ただビルロートは、手術後の患者の看護にも非常に熱心で、このため、看護婦の養成にも力を入れた。<sup>17)</sup>

さらに、フランツ・シュエ（1804—1865）はウィーンの大学病院の外科部長であり、同じく外科医であったフランツ・ピタ（1810—1875）はウィーンにビルロートを招いた人物でもあった。ベルリン出身の生理学者エルンスト・ヴィルヘルム・ブリュッケ（1819—1892）はウィーン大学医学部の教授で、精神分析学者ジークムント・フロイトの師としても有名である。

こうして、19世紀後半のオーストリアが医学、とくに外科学の分野において、ヨーロッパの一大中心地であったことを考えるならば、「オーストリア現代史の一断面」<sup>18)</sup>を描くことをテーマの一つとしていた作家ザールが、医者をモチーフにした小説を執筆したのは至極当然であったと言える。さらに、前節で言及した小説の主人公による外科医療中心主義に対する批判の背景には、死後診断のための人体解剖の方にむしろ重点が置かれていたとさえ言われるほど、「正確に病気の診断を下すことを医学の第一とし、患者の治療をなおざりにした」<sup>19)</sup>、「ウィーン学派」の「治療ニヒリズム」があったことは間違いない。

## V.

小説『医者トローヤン』においてザールが描いたのは、近代化の波に洗われるモラヴィアの一農村とそこに暮らす人々の姿であった。寂れた寒村であったR村は急速に「都市化」し、通りにはモダンな建物が建ち並ぶ。昔ながらの農村共同体的社会は、産業革命の進展によって、資本主義的競争社会へと変貌し、同時に、共同体における申し合わせや慣習は国の定めた制度や法律に取って代わられることになる。ドイツの社会学者で、ザールとほぼ同時代の人間であるフェルディナント・テニエス（1855—1936）の用語を使えば、「ゲマインシャフト」から「ゲゼルシャフト」への移行がまさにR村において進行していたと言える。そして、こうした社会の変化がトローヤンの悲劇を招来することにつながったのであった。

リアリズム作家であったザールは、この小説においても、的確に「時代精神」を捉え、変貌するモラヴィア社会の様相を活写している。しかしながら、そうした社会の変化を描出する彼がその視線を向けるのは、「時代精神」を体現する側の人間たちではけっしてない。小説の

主人公トローヤンは、社会の近代化によって退場を余儀なくされる側の一人であるが、作者ザールは、そんな彼を、私利を求めず献身的に地域医療に挺身してきた人物として、共感をもって描き出している。

物語の中には、トローヤンの境遇に同情し、彼の力になってくれる人間たちが何人も登場する。ひとりは競売にかけられたトローヤンの実家を購入した人物である。彼は、年老いて病も患っていた主人公の父親を家から追い出さなかったばかりか、トローヤンにも奥の小部屋を提供してくれたのである（S.185）。二人目は、主人公がもぐりの医療行為を行っていたとして初めて告訴された時の裁判官である。長年にわたって被告の診療活動を見てきた彼は、今後の活動停止を条件に、無罪判決を言い渡す（S.191）。三人目は、第三章で言及した商店主のネズバダである。主人公の友人であった彼は、自身の商売がすでに左前になっていたにもかかわらず、2度目の告訴で罰金刑を受けたトローヤンのために金を工面してやる（S.193）。さらに、語り手の「私」が言うように（「いずれにせよ、それはふたりの医師の温情を証明するものでした。」（S.186））、トローヤンの医療活動の理解者として、主人公を支えてきたのが、ヴァンカ医師とフーレッシュ医師のふたりであったことは明らかである。ヴァンカ医師はトローヤンの医者としての技量を高く評価するいっぽう（S.174, S.178）、3度目の告訴で主人公が禁錮刑を受けた後は、彼に製鉄所の事務職という就職口の世話までしている（S.194）。フーレッシュ医師は、地域医療に専心するトローヤンを大いに尊敬し（vgl. 第四章）、彼の手には負えない患者を引き受けることで、主人公の診療活動を助けてきたのだった（S.182, S.188）。

功利主義に支配される利益社会が台頭する様子を描写するいっぽうで、小説は、このように思いやりや人情味のある人物たちを数多く描いている。そこには、作者ザールのトローヤンに対する共感が間接的に表現されていると同時に、人と人とがより強い絆で結ばれていた伝統的社会に対する作家自身の郷愁の念が現れていると言えるだろう<sup>20)</sup>。さらに言えば、ときにはトローヤンを諭し、現実を正しく見つめるよう促しはするものの、いわば「後見人」的存在として、最後まで主人公を支えているヴァンカとフーレッシュ両医師の姿の中には<sup>21)</sup>、近代化とともに消えゆく家父長制的人間関係に対する作者の強い思い入れが表現されているように思われる<sup>22)</sup>。

## 使用テキスト

Ferdinand von Saar: *Ferdinand von Saars sämtliche Werke in 12 Bänden. Band 10.* Hrsg. von Jakob Minor. Leipzig (Max Hesse) o.J. [1908].

## 註

邦訳文献からの引用については、地名表記統一のため、筆者により表記上の修正が施されていることをお断りしておく。

- 1) Wolfgang Müller-Funk: *Das Verschwinden der Gegenwart. Interpretatorische Überlegungen zur Traurigkeit des Glücks im Erzählwerk Ferdinand von Saars.* In: *Sprachkunst* 17 (1986), S.16.
- 2) Anton Bettelheim: *Ferdinand von Saars Leben und Schaffen.* In: *Ferdinand von Saars sämtliche Werke in 12 Bänden. Band 1.* Hrsg. von Jakob Minor. Leipzig (Max Hesse) o.J. [1908], S.83.
- 3) ザール全集の編集者ヤーコプ・ミノールによる「前書き」(S.167)を参照のこと。
- 4) Bettelheim: a.a.O., S.163.
- 5) R村がライツを指している点については、Bettelheim: a.a.O., S.158を参照のこと。また、小説には、ブリュン (S.176, S.194)、オルミュッツ (S.179) など、モラヴィア地方が舞台となっていることを明示している地名が登場する。
- 6) ロビン・オーキー『東欧近代史』(越村勲ほか編訳) 勁草書房 1987年、158-159ページ。
- 7) エーリヒ・ツェルナー『オーストリア史』(リンツビヒラ裕美訳) 彩流社 2000年、547-548ページ。
- 8) 南塚信吾編『新版世界各国史19 ドナウ・ヨーロッパ史』山川出版社 1999年、202ページ。
- 9) 同上、212ページ。
- 10) 彼女が元々農民であったことは、本文において引用したトローヤンの言葉によって示唆されているほか、「昔は彼の同棲相手が使用していたに違いないが、今ではよく見ると何ヶ所もひどい刃こぼれがしている錆びた鎌」(S.199)といった表現によっても示されている。
- 11) ツェルナー 前掲書、554ページ。
- 12) 矢田俊隆編『世界各国史13 東欧史(新版)』山川出版社 1977年、249-250ページ。
- 13) 同上、251ページ。
- 14) トローヤンが自身の診断能力に自信を持っていたことは、次のような彼の言葉に表れている。「私は、どんな病気であっても、まあ微かな兆候が見えた時点で見分けがつきますし、その後どうなるか、確実に予測することができる、と申し上げてよいでしょう。」(S.178)
- 15) Vgl. ツェルナー 前掲書、561ページ。
- 16) ウィリアム・M・ジョンストン『ウィーン精神 1. ハープスブルク帝国の思想と社会 1848-1938』(井上修一ほか訳) みすず書房 1986年、340-345ページ。
- 17) 同上、345ページ。
- 18) *Fürstin Marie zu Hohenlohe und Ferdinand von Saar. Ein Briefwechsel.* Hrsg. von Anton Bettelheim. Wien (Christoph Reisser's Söhne) 1910, S.195.
- 19) ジョンストン 前掲書、339ページ。

- 20) 伝統的社会への郷愁は、通奏低音のように物語の底に流れている。そのようなものとして、もうひとつ「自然」が挙げられる。主人公のトローヤンは自然を深く愛好する人物である。第Ⅲ章で引用したとおり、小説の中でトローヤンが最初に口にするのは、R村周辺の自然を称美する言葉であった。彼は昔から野山を歩き回るのが大好きな少年であった (S.179)。医者になってからも、彼は往診のたびに自然を満喫できることを喜びとしている。「そして、彼らの住んでいる場所が村から遠く離れていればいるほど、それだけ私には願ったり叶ったりなんです。そんなときは、往診の道中、金には変えられない喜びを味わうことができるんですから。四季折々、違った喜びを。春は、咲き誇る花々と鳥のさえずり。夏は、風の波立つ畑と樹脂の香りに満ちた森。秋は、立ち昇る霧と穏やかな黄金色の風景。冬は、静寂の雪景色。」(S.184) トローヤンが手術というこの上なく人為的な治療手段を嫌い、薬草という自然の力を借りた治療、自然のリズムを大切に治療を重視している (S.182) 大きな理由もここに求められるだろう。また、長年にわたって周囲に広がる洞窟を調査、研究してきた「有名な自然研究者」(S.171) でもあるヴァンカ医師、「変化に富んだその美しさ」(S.175) に魅了されたかのようにR村の周辺を見て回る「私」を含め、この小説において自然がもっている意味はけっして小さくない。そこには、自然とともに生きる暮らしに対する作者ザールの共感が込められているように思われる。
- 21) トローヤンにとって、ヴァンカとフーレッシュ両医師が「後見人」的存在であったことを示している箇所は、他にも指摘できる。たとえば、裁判の結果に満足できないトローヤンがすぐさまヴァンカ医師を訪ね、自分のために異議申し立てを行ってくれるよう懇願する場面 (S.191)、トローヤンが同棲していた女を炭疽で死なせたとき、フーレッシュ医師がまず考えることが、どうすればトローヤンの罪を少しでも軽くしてやれるだろうか、ということである点 (S.198, S.199) 等である。
- 22) 小説の中にも、「今なおこの土地を支配している家父長制的状況」(S.186) という語り手の言葉が出てくるが、たとえば、ヴァンカ医師から医者としての技量を高く評価されていることに大いなる誇りと喜びを感じているトローヤンの姿には (S.178)、権威ある父とその息子の関係を思わせるという点で、家父長制的な人間関係を見てとることができるだろう。さらに、ヴァンカ医師の自然史研究や「私」の文筆活動を支援している伯爵家のパトロン的行為 (S.173, S.169)、そして、母親を亡くしたホンズィチェックを親代わりになって育てているフーレッシュ医師の慈愛に満ちた行為 (S.200) の中にも、ある種の家父長的な心理を見てとることができるのである。

## 参考文献

註において言及したもの以外に参照した主な文献は、以下のとおりである。

- ・Richard Bamberger u.a. (Hrsg.): *Österreich Lexikon in 2 Bänden.* Wien (Verlagsgemeinschaft Österreich-Lexikon) 1995.
- ・Felix Czeike: *Historisches Lexikon Wien in 5 Bänden.* Wien (Kremayr & Scheriau) 1992-1997.
- ・バーバラ・ジェラヴィッチ『近代オーストリアの歴史と文化。ハプスブルク帝国とオーストリア共和国』(矢田俊隆訳) 山川

出版社 1994年。

- ・ピエール・ボヌール『チェコスロヴァキア史』（山本俊朗訳）  
白水社 1969年。

- ・I. T. ベレンド、G. ラーンキ『東欧経済史』（南塚信吾監訳）  
中央大学出版部 1978年。

- ・山之内克子『ウィーン・ブルジョアの時代から世紀末へ』講談社 1995年。

（平成18年8月2日受付）